

折たく柴の記

上

◆元禄16年の大地震

(元禄15 12/14赤穂浪士討ち入り)

元禄16年11/22 真夜中すぎ 大地震

47歳

白石 湯島に住む

白石は妻子を連れて庭に避難した、倒れた戸を地面に敷き並べて地割れの危険から家族の身を守った後、着衣を改めて日比谷門外にある甲府藩邸（桜田上屋敷）を目指す。途中、神田明神の東門下のあたりで再び激震に襲われた白石は、火災が起きないように家々に「灯り消せ」と叫びながら走り抜けた。神田橋の手前まで来たところでまた大揺れ。家屋が倒壊し人々の泣き叫ぶ声が、たくさんの箸を折ったり蚊が群がる音のように聞こえた。

どこも御門から入れず、いつもの西の脇門からやっと通るが入れず、御納戸口からやっと入る。間部詮房殿に殿がご無事であることを聞く。

翌日藩邸を見れば火が上って、天井も落ちかかっている。やっと間部詮房と会う。家老たちは御庇に敷かれた十畳ばかりを庭上に座って避難していた。

殿より「地震が激しくならない限り、けっしてくる必要はない。急いで家に帰るが良い」と仰られた。

白石はきっと火事が起こるだろうと、塗籠（ぬりごめ）に入れておいた、頂戴した書物、自分自身が抄録したものを取り出して、土に穴を掘り入れ、畳を6.7畳その上に並べて土を厚くかけた。後に塗籠は、予想に反して倒れず焼けもしなかったので、穴に書物を入れたことは無駄なことであった。

◆家宣公、将軍のお世継ぎとなる

宝暦元年12/5 お世継ぎにおなりになると聞く 48歳

お祝いに藩邸に行くと、柳沢吉保など、お供につく人たちはが集まっていた。間部詮房殿を探し、「私から申し上げることはないけれど、『前に申し上げたことをお忘れくださらなければ天下の幸と存じます』その一言を申し上げたく馳せ参じました、殿にお伝えください」と言った。この後白石は家に閉じこもっていたが、ある人（芝崎十郎左衛門）が召し出されるよう哀願しようと思う」と知らせに来たが、長年お仕えした方が出世されたのは、我が身にとって喜ばしいが、皆のように自分のことを哀願することはできかねる、「私としては考えるところがありますので、哀願はいたしたくありません」と答える。

その後26日の夜、士官について処遇することを告げてきた。

◆初めて西の丸に参上する

27日午後4時ごろ 詮房殿から西の丸に参上せよと仰せ付けられた。

戸田長門守忠利・小出土佐守有雪・井上遠江守正方などの人々に出迎えられる。詮房殿が小出と一緒に出てきて、上様の仰せを伝えた後退出。白石だけはここに待つと言われる。

小出殿に「これから後のことは天下の安危に関わる。我々は学問もなく、術策もない、頼りになるのはあなたばかりでだ」と言われる。

◆西の丸で進講を始める

宝永2年正月元日 本丸に参上 11日西の丸で講義が始まり、毎日の講義は藩邸におられた頃と変わりなかった。49歳

ここに 甲府藩内の老中のいざこざが書かれている。

芝崎十郎右衛門が辞職 これは戸田と 厩舎をあづかる諏訪部と当時綱豊につけられた本田ら3人で芝崎を中傷したため、芝崎が怒り辞職 その後憤死した。

また、老中 小出土佐守有雪・井上遠江守正方の争い

(老中 戸田長門守忠利・小出土佐守有雪・井上遠江守正方)

小出は職を奪われ、加増された土地も削られた。

戸田は小出をよく思わず、本田と組んで小出を陥れた。 井上正方は兄が当時の老中（綱吉政権下 井上河内守正岑）であり、松平輝貞と母方の従兄弟同士 柳沢吉保との親戚関係であった。

戸田は世間のことに精通し、機会を掴むことが上手であったが、宝永3年10/15停職となる。

宝永2年8/4 白石は若年寄支配（西の丸）となる（それまでは御側衆支配）

◆宅地と黄金を下される

宝永4年5/19 宅地及び建築資材、それに建築費として金200両を下された。

51歳

◆富士山噴火

宝永4年11/23 51歳 午後 地震があり 正午雷が鳴った。雪が降るように見える、よく見ると灰が降っている。西南の方を見ると、黒い雲があり、雷がしきりにした。草木もまた皆白くなった。25日にまた天暗くなり、雷の鳴る音、夜には灰が多く降る。この日、「富士山が噴火して焼けたためだ」と伝わった。これよりのち、黒灰は止まず、12月の初めにおよび、9日の夜に雪が降った。

世間の人々は咳に悩まされた。

◆当十の大銭を鑄造すること

富士山噴火の後始末をする

宝永5年1/28 52歳 当十（十文に相当）の大銭を鑄造するように仰せがあった。

[表には「宝永通宝」裏には「永久世用」の4文字を刻む。重さ2.3匁、京都七条の銭座で鑄造された]

◆生類憐れみの制

宝永5年8月 馬の立て髪をきることを禁止 52歳

9月 当十の大銭を通用させるべき命令

10月 生類憐れみの法令3か条発令 以来馬に乗る身分の人も、馬は引かせるだけで乗ることはできなくなる。（最後の生類憐れみの令）

◆綱吉公薨去（コウキヨ）

宝永6年 1/10 日が暮れる頃、将軍薨去が告げられる。53歳